令和 5年 1月

守安正太郎　学位論文審査要旨

主　査　　前　垣　義　弘
副主査　　岩　田　正　明
同　　花　島　律　子

主論文

Motor cortical plasticity and its correlation with motor symptoms in Parkinson's disease

（パーキンソン病患者における一次運動野の神経可塑性と運動症状との関連）

（著者：守安正太郎、清水崇宏、本田誠、宇川義一、花島律子）

令和4年　eNeurologicalSci　doi.org/10.1016/j.ensci.2022.100422

参考論文

1. 斜台骨髄炎と海綿静脈洞部腫瘤性病変を呈しステロイドが奏功したLemierre症候群の1例

   （著者：高橋正太郎、伊藤悟、田頭秀悟、安井建一、渡辺保裕、中島健二）

   平成27年　臨床神経学　55巻　327頁～332頁

審　査　結　果　の　要　旨

本研究はQuadripulse magnetic stimulation(QPS)を用いてパーキンソン病(PD)患者における皮質運動野の可塑性を評価し、PD患者における皮質運動野の可塑性に対してL-DOPAが及ぼす影響と、PD患者における皮質運動野の可塑性と臨床症状との関係について検討したものである。その結果、PD患者における皮質運動野の可塑性は障害されており、L-DOPAにより改善され、皮質運動野の可塑性の障害の程度と臨床症状の重度が相関関係にあり、特に運動症状においては筋強剛と動作緩慢が強く相関を呈する事が判明した。本論文の内容は、パーキンソン病の病態生理において、皮質運動野の可塑性がL-DOPAの影響を受け、臨床症状とも強く関連する事を示唆しており､QPSがパーキンソン症状を客観的に推定するツールとなり得る可能性を示すものであり、学術水準を高めたものと認める。